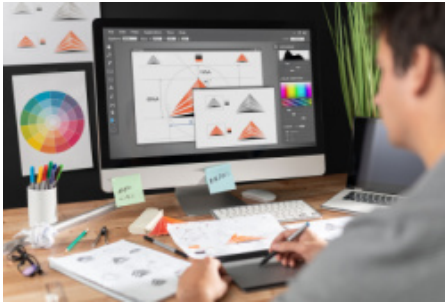


これからのビジネスをつくるための「サービスデザイン思考」(第9回)

「まがいもの」を「ほんもの」にする文化のデザイン

2023.10.31

「価値転換」をもたらすアートの視点



前回のコラムでは、新しい価値を生み出すためには、既存の常識や合理性から距離を取ることが大切だと述べました。新しい価値とは、既存の意味のシステム(価値体制)を解体し、再構築することで生まれてくるもので、このような考え方を哲学者のフリードリヒ・ニーチェは「価値転換」という言葉で表現しました。これは、従来の価値の序列を転換することによって、これまで下に見られていたものや、軽蔑されてきたものの価値が急浮上するような現象が起こることをさしています。

価値転換の典型的なものがアート(芸術)です。特に近代以降のアートは、既成概念に対する批判精神から生まれ、既存の意味のシステムを打ち壊した先に浮かび上がる「何か新しいもの」を創り出すことに重きが置かれてきました。

京都大学経営管理大学院・山内裕教授の言葉を借りるなら、既存の意味のシステムで説明がつかないということは「無意味」に見えるものです。しかし「無意味」は実に面白いものでもあります。意味がないということは、現時点の常識から見ると「正統ではないもの」「邪道なもの」として扱われることにもなりますが、アートの世界ではこの「無意味なもの」を「すごいもの」として扱うのです。これはどういうことでしょうか？

それはアートが、既存の意味のシステムでは「無意味」であっても、時代の流れや社会の変化によって意味のシステムが変化し価値転換が起こる中で、「いずれ意味を持つ可能性があるもの」を見つけ出し、形を与え、世の中に提案する営みだからなのです。そういう意味で、第7回のコラムで紹介した「意味のイノベーション」はアートに通じるものがあるのかもしれない。

自身が名画の登場人物にふんする作品で有名な芸術家の森村泰昌氏は、著書の中で美について次のように語っています。

美とは未来に向かって振り返ることであり、そしていつも美はまがいものとして現れるのです。

(『美術の解剖学講義』ちくま学芸文庫、2001年)

新しい美が提案される時点では、その美は既存の意味のシステムの中では「まがいもの」として見られることもあります。しかし、その

「まがいもの」が
いずれ正統なもの

として扱われていく過程こそが、新しい価値体制を生み出すアートという行為である、と森村氏は述べています。

社会の「あたりまえ」をつくる文化のデザイン… 続きを読む